
転生して異世界廻り～GOD EATER 編～

黎白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して異世界廻り～GOD EATER 編～

【ΖΖコード】

Ζ1174Ζ

【作者名】

黎白

【あらすじ】

D・C・?の世界で死んだ主人公がゴッドイーターの世界に転生
「本当はフュアリーテイルの世界も行つたんだけどな。」
……。蒼影のゴッドイーターとして生活が始まる？

ちなみに前作のよう、ハーレム、原作崩壊、チート、最強要素あります。チート、最強は多分ですけど。後は他の作品のキャラができるかもしません。更新はD・C・?より不定期になると思います。感想どんどんお願いします。

転生、アラカリとの戦い？（前書き）

こんな小説を読んでくれてありがたい気分がします。

転生、アラカリとの戦い？

「また、ここかよ。」

今俺が居るのは、転生の時に来た空間だった。

「つたぐ、お前はどれだけ恋人増やすんだよ。また全員ついて行くみたいだぞ？」

「夕紀か……。あいつらは？」

「多すぎるから連れてきてない。安心しり、せつき行つたみたいに全員ついて行くみだから。」

まあ、今回は生きてた時に話したしな。

「なんか悪い。あ、次はGOD EATERで頼む。」

「本当に悪いと思つてんのかよ……。」

悪いことは思つてるが、それとこれとは別だからな。

「まあ、いい。で、誰を連れて行くんだ？」

「連れて行くのはそつちで決めてくれ。あの世界は危険多いからな。別に余おつと思つたら余える訳だし、危険多いからな。」

実際また転生するとは言々、目の前で死んだりしたら嫌だし、GOD EATERはFAIRY TAILより死の危険が多いからな。

荒神は手加減なんかしてくれないし。

「わかった。そうだ、この世界ではリンクとサクヤは付き合つたりしないから。あと原作といろいろ変わつてるとか。」

あの一人付き合つたりしないんだな。でもどうして俺に言つたんだ？

「何で言つたんだ。」

「転生がリンクとサクヤの幼馴染みだから、フラグ建てても気にしないようにな。」

リンク達と幼馴染みか……。てか今の失礼じやないか？

「何でフラグ建てるの前提だよ。」

「今の恋人数えてみる。原作キャラは基本的に全員、原作以外も建てるだろ？が。」

……確かに。

「今回もそつとは「なるな。実は転生時にフラグ体質とか着けたから。」お前のせいかよ！？」

だからあんなにイベントが起つてたのかよ。

「つて事でとつと行つてこい。だいたい原作四年前で十一才だから。その頃には神機使いになると思つから。」

そこまで決定してるとかよ……。

まあ、いい。今回も原作は氣にしないでいいみたいだから、とりあえ
ん変えていいか。

「蒼影、早く来いよ。」

「わかったる。」

今何をしてるかって？まあ、転生して八年が経つた訳で、原作キヤ
ウの幽宮コンドウ、橘サクヤと遊んでいる。ちなみにサクヤさんは
十三歳リンクドウは十八だ。

リンクドウは俺の子守みたいな感じで遊んでるのが少しムカつぐ。

やつこえば、リンクドウが神機使いになるのいつになんだ？原作と
は違つんだから、どうでもいいんだけどな。

「どうしたの？」

「何でもないよ、サクヤさん、リンクドウ。」

「こつも思ひたさう、何でサクヤはせん付けで俺は呼び捨てなんだよ。」

「

「アラガミいるかもしないのに八歳を連れて行く奴にさんはいらないだろ。」

そう、俺はリンドウに連れられては花を見に行つてゐるんだけど、アラガミがいるかもしないんだよ。てか本当に八歳連れて居住区でるか？

理由はサクヤさん的好きな花を取りに行くらしい。てかリンドウつてこんなキャラだったか？

「いや、お前八歳にしてはおかしいだろ。」

「確かに蒼影つて大人びているわよね。」

「ほりな、サクヤだつてこいつ言つてるだぶ。」

「だからいつてな……。まあ、いいや。こいつちなのか？」

「ああ、ここの時代にしては綺麗な場所だから期待してひ。」

こんな事になつたのも、リンドウが規模は小さいが花畠を見つけたらしく。実際、アラガミがいるこの世界では珍しいからな。

「全くアラガミが来たらどうすんだよ。」

「その時は俺が囮、囮は無しな。三人で帰るんだから。…………わかつたよ。」

リンドウは原作でも自分を犠牲にしてたからな。無いとは思つが、

俺がいる事でイレギュラーがあるかもしれないしな。

「蒼影の匂いとおつよ。リングウだけを置いていったらほしないわ。

」

「わかつたよ。あ、ここだ。」

「わあ…………。本当に綺麗ね。」

「確かに、こんな世界では珍しいな。」

「だろ？だから蒼影とサクヤに早く見せたかったんだよ。いつこの景色が無くなるかわからないしな。」

リングウが連れててくれた場所には、小さしながらも必死に生きている花があった。

やつぱりこんな時代だからこそ、綺麗に感じるな。前の二つの世界は、こんなに荒れた世界じゃないから、こんな小さい花畠じやあまり感じる事も無かつただろうな。

「でもね…………。」

「あ、ビックリしたんだよ、蒼影。」

「いやや、いろんな場所にある花畠を知つてるって事はや。」

「じつじたの、蒼影。何かあるの？」

サクヤさんも気が付いてないんだな。この年なりじょうがないか。

「少なくとも一回は一人でここに来たんだよな？」

そう。こんな場所知つてるのは一度來てるからで、少なくとも一人で居住区から出るつていう危険な事したんだよな。

何度もどこかに行つてるなとは思つたけど、リンドウももう大人だし無視してたけど、これは流石になあ。

「いや、それは……。」

「蒼影の言つとおりね。リンドウあなたねえ。」

「アラガミに襲われなかつたから良かつたけど。」

「実際、襲われなかつたけど、見た事は……。」

「はあ！？リンドウお前馬鹿かよ！？」

アラガミ見るつて結構近い場所にいたつて事だよな。本当に襲われなくて良かつたよ。

リンドウを見ると、サクヤさんに説教されていた。十三歳に説教される十八歳つて……。場所が場所だし、結構シユールだよな。

リンドウの説教はサクヤさんに任せて、俺はこの綺麗な花畠でも眺めとくか。この世界に来て八年間、まともに綺麗な景色なんて見た事無かつたからな。

初めは、ゲームが面白いなんて理由で選んだのに後悔したな。今で

はそんな事ないけど。

てかさ、リンドウ達は気付いてないけど、さつきからアラガミの声が聞こえてるんだよなあ。一応能力使うか？

「蒼影どりしたの？」

「何もなこさ。サクヤさんはリンドウの説教続けてくれ。」

「蒼影！頼むから止めてくれ！――」

「ヤダね、居住区の外はアラガミがいるの知ってるのに、一人で出て行つたんだ。実際俺も混ざりたいんだよ。」

「うう……。」

転生してからずっと幼なじみだったんだしな。心配するのも当然だ。

てか、何考えてたんだっけ？

ああ、アラガミが来たらだ。一応技能作成《スキルメイク》でいろいろと作つてるからな。焰手品《フレアマジック》を初めとした五大手品なら、規模は小さいから目立たないし、丁度いいな。

ちなみに、五大手品つてのは焰手品《フレアマジック》、凍手品《アイスマジック》、雷手品《エレキマジック》、嵐手品《サイクロンマジック》、岩手品《ロックマジック》の五つだ。

これは、規模が小さく威力の大きいその属性の魔法を使えるようになるつてのだ。

これを作ったのは、D・C・?の世界でマジックショーをみた時だつたな。

グルル

.....。

「なあ、サクヤ今何か聞こえなかつたか？」

「聞こえたわね。」

「アラガミ.....。」

「「えつ！？」」

目の前には、小型のアラガミ、『オウガテイル』が一體いた。

「逃げるぞ、サクヤ、蒼影。」

「先に逃げてくれない？流石に三人だと逃げきれないからさ、助け呼んで来てくれない？」

オウガテイルとの距離からして、逃げたらその音で気付くだらう。なら一人が囮になるべきだ。

「ふざけるな！お前が三人でつて言つたんだろ！囮なら俺が.....。」

「駄目だよ。それに餓鬼が助け呼ぶより、リングドウみたいな年上が呼んだ方が信じるだろ？」

「駄目よ、蒼影！！」

まあ、俺は今八歳な訳だしな。普通に考えたら、任せれないよね。
「リングドウ、頼むって。俺、リングドウに勝った事あるし、大丈夫だ
つての。」

「…………、絶対だな。絶対に死がないんだな。」

「ああ、信じる。」

「わかった。」

「コンドウー？何言つてるのー？」

「行くぞ、サクヤ。」

リングドウはサクヤさんを連れて行つた。信じて貰えて良かったな。
普通は信じないんだろうからな。

サクヤさんの為にも、わざわざ俺を信じてサクヤさんを連れて行つ
てくれたリングドウの為にも、生きて帰るか。

「さて、観客はいないが、マジックショーの始まりだー！」

転生、アラカリとの戦い？（後書き）

つて事でGOD EATER編です。

「大丈夫なのかよ。」

D·C·?でも書いたけど、不定期にはなる。しかも原作までは時間がかかるぞ。

「まあ、頑張れ。」

分かってる。こんな小説を読んでくれる皆様ありがとうございます。

「感想やメッセージも待つてます。」

アラガミとの初バトル

リンドウ slide

俺は、蒼影とサクヤを連れて前見つけた小さな花畠に行つた。あまりこういう事に興味の無い俺でも、綺麗と思ったから一人なら喜ぶと思った。

思つた通り、二人は喜んでくれた。まあ、蒼影の一言……俺が一人で居住区から出てつたという事を、蒼影が気付いたせいで俺はサクヤに説教された訳だが。

でも、説教が終わつた後はサクヤも蒼影もその花畠を見ていた。

それに説教は面倒だけど、俺を心配してくれてた訳だし、その事は結構嬉しかつた。

ちなみに、蒼影は説教の間も花畠を見ていたんだけどな。まあ、それでも心配はしてくれたみたいだ。

で、その後何かの声が聞こえたかと思つと、蒼影が呟いた。

「アラガミ……。」

見るとアラガミが一體いた。幸い気付かれてたいみたいだから、一人に声をかけた。

「逃げるぞ、サクヤ、蒼影。」

「先に逃げてくれない？流石に三人だと逃げきれないからさ、助け呼んで来てくれない？」

俺が声をかけると、蒼影は俺に言ひてきた。

「ふざけるな！お前が三人でつて言つたんだろ！囮なら俺が……。」

蒼影が言つたのは、囮を買つて出たようなものだ。それなら、こんな所に連れてきた俺がやるべき。そう思つたが……。

「駄目だよ。それに餓鬼が助け呼ぶより、リングドウみたいな年上が呼んだ方が信じるだろ？」

「駄目よ、蒼影！！」

「リングドウ、頼むつて。俺、リングドウに勝つた事あるし、大丈夫だつての。」

「…………、絶対だな。絶対に死はないんだな。」

「ああ、信じる。」

「わかった。」

サクヤは止めようとしていたが、蒼影の口は死ぬ気なんてまったくなく、何故か信じてみようと思つた。

「リングドウー？何言つてるのー？」

「行くぞ、サクヤ。」

だから、サクヤを連れて逃げ出した。少しでも早く助けを呼ぶために。

助けと言つても何をしていいのかは、わからなかつたが。

「リングドウー蒼影が！」

「蒼影は死なないつていつたんだ。信じて助けを。」

一番年上の俺が年下に任せるのは嫌だったが、実際蒼影は俺に勝つた事もあつた。

だから、サクヤの声を無視して信じる事と助けの事だけを考えて行動した。

今、俺に出来る事を考えて……。

蒼影 side

「ありやつや。なんかザイゴートいんじやん。」

確かオウガテイルの弱点は神だけど無いから他の属性しかないな。ザイゴートは神以外だから、焰手品《フレアマジック》、凍手品《アイスマジック》でいくか。

「凍手品！形成！」

凍手品を使用し、弓と矢を作り出す。体は八歳だから、遠距離で倒

すしかないからな。まあ、神機じゃなく倒れるかは分からないんだけど。

しかもオウガテイルはアラガミの原型であるにもかかわらず、近距離、遠距離、全方位への攻撃手段を持ち合わせているからな。たしか原作か漫画か忘れたが、ペイラーから「原型にして完成体」と評されてたような気がするな。

ザイゴートも面倒だな。

「つふ。」

まずはザイゴートを潰す。幸いザイゴートが行動する前に落とせたから、被害はない。後は、オウガテイル一体だな。

こんな事なら神系で作つておけばよかつたな……。

飛びかかってきたオウガテイルをよけ矢を打ち込む。

「燃えろつーー！」

この力で作つた物は俺の自由に出来るから、打ち込んだ矢は消えずに残り、俺の言葉に反応して燃え上がつた。体中に火がついたオウガテイルは、悲鳴？を上げながら倒れた。

後は一体。残つたオウガテイルはさつきの攻撃を見たからか、警戒してゐみたいだった。

「警戒してゐみたいだけどな、この矢の射撃範囲に入れば逃げきれないとーー！」

分からぬだらうけどオウガテイルに対して叫び、矢を放つ。警戒しても射撃範囲に入ってるオウガテイルは、逃げきれる訳もなく燃え上がった。

「ふう……、技能作成『スキルメイク』で作った力でも、アラガミを殺せるみたいだな。」

俺の周りには三体のアラガミの死体。他のアラガミにこの場所を荒らされないよう、一応死体は完璧に燃やすか。

「焰手品、炎球。」

火を球体にして、死体に当てる。当たった死体は一瞬で燃え上がり、跡形もなく燃える。

そして残つたのは、リンドウの教えてくれた花畠と俺だけになつた。花畠は壊さない様に気を使って闘つたしな。

「さて、リンドウとサクヤさんの所に帰るとしますか。」

助けを呼ばれてたら説明面倒だし、早めに帰りたいな。

「たつだいまー。」

「「蒼影……」」

居住区に戻ると、リンクドウとサクヤさんが駆けてきた。

「蒼影、無事だつたの！？怪我は！？」

「大丈夫だよ。心配かけて「ゴメン、サクヤさん、リンクドウ。」

「悪い……、助けを呼べなくて。」

「別にいいさ。三人無事だつた訳だしな」

「悪い……。」

「だから……。」

パンツ

「痛つてえ。」

リンクドウと話していたら、サクヤさんに叩かれた。こうこう時のビンタつて結構痛いよな。

「無事だつたから良かつたけど、死ぬかも知れなかつたのよ！？」

「…………。」

「一番年下の……、一人で……。」

俺を叩いたサクヤさんは泣いていた。原作では、リングドウが「なくなった時くらいしか見た事なかったな……」。

「『メソン……。』

サクヤさんを泣かせたのは俺なんだし、何も口論出来ねえ。

「無事で……よかったです……。本当に……。心配したのよ……」

サクヤさんは泣きながら俺も抱きしめた。

悪い事したな……。

「もうしないからさ。泣き止んでくれよ。(ナドナド)」

前の世界でもやつたように、泣いているサクヤさんの頭を撫でてみる。

年下に泣きながら抱き付いて、頭を撫でられて結構異様だな。

「あー、リングドウ助けてくれ。」

「知らねえよ。サクヤだってかなり心配してたんだ。自業自得と思つて受け入れな。」

はあ、心配されるのは嬉しいけど、泣かれるのはキツーな。

「頼むよ。」

「なあ、どうやつて逃げてきたんだ？」

「何が？」

「アラガミからだよ。一体もいたんだし、隠れるならまだしも逃げ切るのは難しいだろ。」

「運だよ。偶然大型のアラガミが来てな。お陰でなんとか逃げきたんだよ。」

これなら誤魔化せるかな？大型のアラガミが来る事なら実際にあるしな。まあ、大型のアラガミが来てで生き残れる事は、ほぼゼロに近いだろ？けど、ゼロじゃないし大丈夫だろ。

「よく生き残れたな。まあ、俺達も蒼影のお陰で助かつたんだし、もういいか。」

「リングドウーそういう問題じゃないわよ！」

「サクヤも落ち着け。次からは無いようにさせねばいいだろ。」

「えーと、次からは俺も気をつけるからや、今回は許して欲しいんだけど……」

「絶対にしないって約束して。」

「わかつたよ。」

まあ、いざという時はまたやるけど。出来るだけは約束つて事で。

口にはしないけどな。

「無事に帰つてきたし、今回だけは許してあげるわ。」

「なら家に帰るわよ。」

「わづね。」

「もつこんな事は遠慮したいな。」

アラガミと鬪つとはいんだけど、サクヤさんつてか女人に泣かれるのはキツいしな。

多分だけどリンドウとサクヤさんは原作通り「ロッヂイーター」になるんだろうな。ツバキさんもそうだしな。

俺も「ロッヂイーター」になつて守れるよつにならなーいとな。アラガミには神機が一番だろつ。

アラカリとの初バトル（後書き）

投稿ですが、一日一回にします。

一日一回は一作品でなので、どちらを更新するかは分かりません。

書き上げがれば一作品投稿かもしないけど。

「考えなしにするから、困るだろ。」

いやな、忙しくて書き上げがらないんだよ。

「なんかそばかりじゃないか？」

まあ、そういう事で。

「感想やメッセージ待ってるんで。」

みひじくお願こじめす。

あのアラガミの事件から五年経ち俺は十三歳になつた。ちなみに、リンクドウやシバキさんはすでに「ゴシドーター」になつていた。

ちなみに、サクヤさんは一年前に入隊していて、今はオペレーターをやつてるみたいだ。原作では、一年オペレーターで「ゴシドーター」になつたんだよな。

まあ、原作より入隊遅いような気もするんだけど、原作ではあまり書かれてないから、よく分からんんだよな。

そいえば、今居る原作キャラって誰だろ? な。

ツバキさん、サクヤさん、リンクドウあとリックがいたよな。他は分かんねえや。

「面倒だな……、場所も分からんしな……。」

「何をしていい。適性検査はどうした。」

「あ、ツバキさんっすか。丁度いい所に。」

「なんだ?」

「場所分からないから、教えてくれません?」

「…………まつたぐ。」

なんか呆れられてるな。まあ当たり前か。

「なんかすいません。」

「ううちだ、早くついてこ。」

「ありがとうございます。」

「しかし、お前が『ゴッドイーター』、しかも新型の候補になるとほな。」

「まあ、俺も守りたい人がいますからね。リンクやサクヤさん、ツバキさんもですね。」

バシッ

「思ひ上がるな、私はお前に守られるほど弱くない。もちろんリンクもな。」

「痛い……。てか弱い、弱くない関係ないでしょ。戦場なり、お互いに争つ仕られじゃないんすか?それにツバキさんは女性だし……。」

「まつたく……。／／／」

ん?なんか照れてるみたいだな。偏見だけど『ゴッドイーター』は女性扱いされなさそうだし、女性扱いに慣れてないとかか?

いや、流石にないな。

「まあ、こいや。やいえばやくはオペレーターとして働いてるんで
すよね?」

「ああ、後で挨拶しておくれとこ。こつも心配してこたからな。」

「いえば、サクヤさんは休暇貰った時は念っこに来ててくれたな。

「わかつてますよ。ちなみに、ツバキさんはどうなんですか?」

「何がだ?」

「心配してくれてたんですか?」

「当たり前だ、お前はまだ子供もだからな。まあ、それ以外もある
が。」

「いえば俺十三歳だったな。てかそれ以外ってなんだ?」

「ツバキさん、それ以外って?」

「聞こえていたのか。／＼お前にはまだ分からんだらつよ。」

……もしかしてフラグ建てた?夕紀の言つ事には、フラグ体質
なんて付けてたみたいだし……。

いや、まさかなあ。

「で、まだですか?」

「いりだ。」

おお、いつの間にか着いてたみたいだな。

「あつがとうござりますつと。んじゅ。」

中に入ると上から声が聞こえてきた。

「ようじゅ……。人類最後の砦フュンリルへ……。今から対アラガニア討伐部隊『ゴッディーター』としての適性試験を始める。」

演説で多くの人々を魅了するよつか美声が円形の広い部屋に響き渡る。

この声はヨハネス・フォン・シックザール、ソーマの親だったよな。

この部屋の壁にはあちこちに傷や弾痕などがついている。神機でつけた傷なんだろうな。そして、この部屋の中央には台座が置かれていた。

普通ではなかなか目にしない光景に少し気圧されないと、ヨハネス……支部長から再び声をかける。

そいえばこの時期ヨハネスって支部長だつたんだな。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい……。心の準備ができたら中央のケースの前に立つてくれ

「了解」

そう答えて、部屋の中央へゆっくりと向かっていく。置かれている

ケースは上下半分に分かれており、それぞれに半円型の赤い物体がはめられていた。その物体がある場所は、あいだに置かれた剣の柄の部分……。

神機と腕輪だよな……。なんだかものすごく嫌な予感がするんだが……。恐れても始まらないし、柄に手を伸ばす。

「ふう……。」

すると案の定、上の蓋がギロチンのように落ちてきて腕を挟んだ。

「ぐつ……。ぐううつっ……。」

グチャグチャと嫌な音をたて、手首に堪えがたい激痛が走る。

ヤバいな、前の世界での闘いと同じかそれ以上だ。しかも久しぶりの痛みで、油断もしてたから声が出てしまう。

ケースの上蓋が開いくと赤い腕輪をつけた自分の腕と、その手に柄をしっかりと握られた剣が出てきた。

やつぱり初めの装備は見た目も簡単だよな。と、そんな事を考えていると、柄のすぐ上にある黄色い物体から黒い触手が伸びてきて腕輪に刺さつた。

気持ち悪いな。

「おめでとう。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

ヨハネスの声が響く。どうやら終わったみたいだな。面倒だつたな。

「次に、適性試験後のメテイカルチェックが予定されている。後ろの扉から出て、指定された場所まで行って待機していく。尚、『気分が悪い』など症状がでた場合は即座に申し上げるよ。」

期待してるよ、波柳 蒼影君。」

「うひっす。」

原作通りなら、リングドウと同じように利用するつもりなんだろうけど、簡単にはいかさないぜ……。もちろんリングドウも殺させねえ。まあ、正確にはアラガミ化させないだな。

さてと、どうすっかな。サクヤさんの所にでも挨拶しに行くか。メディカルチェックもいつ行くかわからんし、ついでに聞けばいいや。さてとエントランスにいけばいいんだよな?原作ではエントランスだったたし。

「あれ?見ない顔だね。新人君?」

後ろから声をかけられたから、後ろを見てみると、白いタンクトップにゴーグルをした女の子がいた。

原作より幼いけどリッカだよな……。

「はい、今日から配属になりました。」

「ふーん。あ、もしかして新型の?」

「はい、一応新型神機使いです。」

「そつか、私は楠リッカだよ。なにか分からぬ事あつたら聞いてね。後、敬語は使わなくてよいよ。」

「わかつた。よろしくな、リッカ。」

「ふふつ、適応早いね。えつと……。」

「いえ、新型としか言つてなくて、名前は教えてなかつたけな。」

「俺の名前言つてなかつたな。俺は、波柳 蒼影だ。」

「改めてよろしくね、蒼影。いえ、どこか行こうとしてなかつた？」

「Hントランスに行こうと思つたんだけ。」

「なら、私も行くつもりだつたから、一緒に行こうか。」

「助かつたよ、ありがとう。」

原作キャラとも知り合になれたし、今日は運が良かつたな。リッカは原作でも好きだつたしな。

「でも、凄いよね。」

「何がだ？」

「だつて、私より小さいのにゴッドイーターなんだから。」

「リック力だつてここで働いてるんだろ?」

「私は整備班にいるけど、正式なメンバーじゃないからさ。それに、ゴッジドーターみたいに命の危険は少ないし。」

「でもさ、整備士がいないと神機の本格的な手入れは出来ないし。それに、正式じゃなくても神機の整備を出来るのは凄い事だと思うけど。」

実際に神機の整備がきちんととしてないと、いざという時に使えないかもしれないしな。神機はアラガミと闘つ唯一の武器だしな。

「ふふつ、ありがとう、蒼影。」

「別に礼を言われる事はしてなくね?」

「着いたよ。またね、蒼影。」

「あ、ああ。」

リック力は俺に声をかけ、走つていった。結局なんで礼を言われたんだろう……。

まあ、いいや。サクヤさんを探して挨拶とメディカルチェックとかの事聞かないとな。

ついでにリンドウにも挨拶しないとな。これからは先輩つて事になるんだしな。まあ、リンドウとは友人みたいな感じだし、敬うつむりは全くないんだけどな。

新型神機使い（後書き）

ネタが無いー。

「いきなりなんだよ。」

後書きのネタがないんだよ！

「知るか、ボケ。」

ひどい……。

「てか、なんでもいんじやないのか？」

なんかネタ無いと書けないだろ。

「そこは、ホラ、文才で……、いや、無いか。」

黙れ。ん……、アンケートでもするか？

「どうせ俺の能力かネタだろ？」

あと人気投票？まあ、お気に入り少ないし、感想や投票そんなにあ
ると思わないけど。

「いや、感想はあるだろ。お気に入りは確かに少ないかも知れない
けど、増やす方法なんて無いだろ？」

わからん。まあ、無期限で技能作成『スキルメイク』と話のネタや

リク募集するか？

「リク書けるのか？」

「あ？ ただ参考には出来るし。」

「はあ……。読者の皆さん、よかつたら感想、リク、ネタお願いします。」

よろしくお願ひします。

ナラ、ナラの外語(前書き)

アンケートあります。

「久しぶり、サクヤさん。仕事どうですか？」

「蒼影、どうしてここにいるの？」

「といえばサクヤさんやリンクでには新型の適合者になつた事言つてなかつたけな。一人共フエンリルで働いてるし、あまり会う機会無かつたからな。会つてもわざわざ神機とかについて話したりしないしな。

「えつと、実は新型の神機使いになつたから。だから、サクヤさんとリンクでに挨拶するついでに聞きたい事があつて。」

「新型…? ジやあ、今日配属されるつていう新人つて、蒼影の事なの?」

「やうひいつ事になる。」

「聞いてないわよ……。そういう事はきたりと伝えてよね。」

「あー、機会が無かつたしな。」

「リンクでには伝えたの? 後、聞きたい事つてなにかしら?」

「リンクでにも伝えてないよ。でか、サクヤさんの方が会いに来てるわけだし、サクヤさんしらないのにリンクでが知るわけ無いから。聞きたい事つてのは、メディカルチェックやらの事だよ。」

「まったく、まあいいわ。えっと、今後の予定はメディカルチェックを受けた後、基礎体力の強化、戦術理論の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムみたいね。」

「……面倒だな。」

「か俺から聞いたけど、サクヤさんが知ってるんだ。」うこうの原作のツバキさんみたいな教育系の人が知ってるもんだと思った。

「そう言わないの。榎博士の研究室に一五　までに行くようにな。それまでこの支部を見回つてたら？　今日からお世話になるんだし、挨拶の一つでもしておいたらいいわよ。」

「了。」

「か榎博士ももういるんだ。まあ、ヨハネスがいるわけだし、いてもおかしくないか。」

「確か榎博士の研究所はラボラトリにあつたよな。」

エレベーターに乗つて榎博士の研究所を目指す。その間他のゴシックドライバーの視線が珍しそうに見てくるから、ウザくてウザくて。

この支部初の新型だからか、俺の年のせいか分からないけど、こんなに見なぐてもよくなのか？

「」

「波柳蒼影です。」

ノックがいるのかは知らないけど、一応ノックをしておく。

「入つていいよ。」

許可を貰つたし、中に入るか。

中に入ると、機械やコードがそこら中にあり、その中で忙しそうにキーボードを叩いている猿田の男と、白いロングコートを着た男がいた。

ペイラー神とヨハネス・フォン・シックザールがだよな……。

「ふむ……、予想より862秒はやい……、よく来たね、波柳 蒼影君。私はペイラー神。アラガミ技術開発の統括責任者だ。」

自己紹介の時くらい指止めるよな……。まあ、別にこんなキャラなのは分かってるけど、知らなかつたらかなりムカついてたな。

「さてと……、見ての分かると思うけど、まだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

榎博士はそう言つて支部長を見る。

「榎博士……、そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい。先程の適合テストではご苦労だった……、私の名はヨハネス・フォン・シックザール。この地域一帯のフェンリル支部を統括している。さて、我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。君に課せられた責務は、この地域周辺のアラガミの撃退とその素材を持ち帰ることだ。そしてそれらは全てここ……、前線基地の維持と、来るべきエイジス計画の資源として使われる。」

「「Jの数値はつ……！」」

突然榎博士の声が横から割ってきて説明が中断される。少し驚いて榎博士の方を見る。

何か怖いな。まあいい、今は話を聞かないと。

「エイジス計画……、って確かに外部居住区のメディアでもよく取り上げられているあの計画だよな。」

ヤベ、ついタメ口出でしまった。まあ支部長は表面上気にしないし、別に大丈夫か。

「そう……、人類の楽園を作るという理念のもとに進められている計画だ。」

正確には、旧日本海付近に外部居住区のものとは比べものにならないほど強固な、対アラガミ装甲を展開した人工の島を作り、そこに人々を住まわせるというものだ。」

「ほほ————！」

また榎博士の声が割つて入るが、支部長は無視する。

よくあの声を無視できるよな。結構でかい声なんだけどな。

「「Jの計画が成就すれば……、少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来るはずだ。」

「す」「つ……」それが新型か――――――

「ペイラー……、説明の邪魔だ。」

ついに堪えられなくなつたのか支部長がが榎博士に注意する。

「べ」「まで耐えたと誓めてやりたい。何様かつて話だけだ。

「ああ、『ゴメン』『ゴメン』……ちょっと予想以上の数値に舞い上がりかけやつたんだよ。」

榎博士の様子にため息を漏らしている支部長。

……やはり、支部長つて苦労してるんだな。アーヴ計画の一部には、榎博士に対するストレスあるんじゃないの？

榎の様子にため息を漏らすシックザール。

「ともあれ、人類のためだ。尽力してくれ。では、私はこれで失礼する。ペイラーは検査が終わつたら、私にデータを送つておいてくれ。」

支部長はそう言つて、部屋を出て行つた。

「よし！準備は完了だ。そこのベッドに横になつてくれ。少し眠くなるけど心配はいらない。

次に目が覚めたときは自分の部屋だ。戦士のつかの間の休息といつやつだね。予定では10800秒だ。ゆっくりおやすみ」

何されるんだ？……。少し……いやかなり不安なんだけどしょ

うがない。横になると、検査が始まった。

榊 side

眠った蒼影君を部屋へ送った後、自分専用のターミナルにアクセスし、ハイドの計測データを見る。

ふむ……、ただでさえ適合していく新型神機に選ばれ、なおかつソーマ以上の適合率の高さ……、間違いないなく即戦力となる逸材だね……。

現在世界に新型神機使いは数えるほどしかいない。その中でも蒼影君の潜在能力の高さは群を抜いるね。

「指導方法や成長次第では世界最強の『ゴッドイーター』になるかもしないな……。」

比較的に不味いコーヒーを飲みながら呟く。

これから蒼影君はいろいろな疑惑に巻き込まれるんだろうね。

蒼影 side

目が覚めたら、部屋のベッドにいた。ここは俺の部屋になるのか？

結構綺麗な部屋だし、外部居住区とはかなり違うな。やつぱりフュンリルは凄いんだな。

「そいえば、検査あつたはずだよな。特に傷とかないし、どんな検査だつたんだろ?」

まあ、いい。まずは服を着替えるとするか。

俺の服は原作で言つスイーパーノワールだ。黒色は結構気に入つてゐるからな。本来はフュンリルから支給されてるの着るんだろうけど、こつちの方が気に入つてるしな。

他の「ツッディーター」もそれぞれ違つ服着てるし、大丈夫だろ。

なんか着にくいな。…………。

「ああああーー腕輪邪魔だつてのーー!」

俺の右腕に付いている無骨な腕輪が、服に引っかかつて着にくいーー!

「通れつーー!」

はあ、なんとか通つたな。訓練用のミッションでも受けれるか…………。

そいえば、訓練用のミッションって誰が担当するんだろうな。

「サクヤさん、訓練用のミッションを受注したいんだけど。」

「分かつたわ。ツバキさんが用意したミッションが届いてるわ。準備が出来たら出撃ゲートから案内表示の指示に従つて第一訓練場へ

「移動して。」

「了解。」

「ミッションの受注や報酬の受け渡しなどは私が行つから、これら関わる事は多いと思つわ。よろしくね。」

「ああ、てか関わるのはそんなん関係ないナゾね。幼なじみだしさ。」

「

「そりだつたわね。訓練頑張つて。」

「今、サクヤさんなんて言つた？」

「ツバキさんが用意した……？もしかしてツバキさんが担当なのか？」

「うわあ……。嫌だな、原作でも鬼教官なんて言われてたし厳しいだうつむ。」

「まあ、頑張るか……。」

「最近」ひびしか更新してなくないか？といつか、俺の出番は？」

「リンドウは原作で出るしいじやん。といつ事でGOD EAT E Rからリンドウに来てもらいました。」

「つたく、で？なにがあるんだろう？」

「ああ、原作前にロシア編やるつもりなんだけど、ダニーハラと大車どうしようかと。」

まあ、ここでアリサの洗脳といて、オレーシャを殺させないようにするんだよ。で、オレーシャとリティアは極東支部にアリサと行くんだけど、ダニーハラをハーレムに入れるかつてのが一つ。

「だけどよ、今も捌けてないじゃねえか。」

まあ、そつなんだけど。で、一つ田が大車にはロシアで退場願おうかと。

「なんでだ？」

だって、アリサの洗脳といったって、大車いたらまた薬で洗脳されるじゃん。後、ウザイ。

だから、ダニーハラと大車をどうするかアンケート取らうかと。

「なるほどな。俺からも協力頼むわ。」

期限はロシア編始まるまでかな?

みひしくお願ひします。後、技能作成の方も何かあつたらお願ひします。

「んじや、俺はアートだか!」

頑張れよ。

えつと、じつちだな。原作では見えなかつた所も見えるし、面白いな。

スッという音と共に扉が開く。中は適合テストを行つた場所と似ていた。その中央には、ツバキさんがいた。

「ツバキさんが担当なんですね。仕事大丈夫なんですか？」

「お前が気にする事ではない。それに、私はそろそろ引退するからな。」

ツバキさんつて、この時期に引退するんだな。

「引退つすか……、一緒にミッション行くのは無理なんですね。」

「そういう事になるな。まあいいだろつ。早速トレーニングを開始するが、その前にまず簡単な説明をしよう。お前やその他の者達、現役を引退したゴッドイーターまで、皆腕輪からオラクル細胞を投与している。オラクル細胞についての詳しい説明は、近いうちに榎博士が講義を行うのだろうから、そこで学ぶように。そしてそのオラクル細胞は、人体への投与に成功すれば、身体能力を爆発的に引き上げてくれる。筋肉の瞬発力や持続力、反射神経や動態視力、聴力など身体中のほぼ全ての器官が強化される。よつてそれに比例したトレーニングメニューとなるのでそのつもりでな。」

「マジかよ……。」

比例したトレーニングって、絶対に量多いよな。しかも小さい時から俺を知ってるし、身体能力が高いの計算してトレーニングさせそうだな。

「一応言つておぐが、お前は他の「シニア」よりも厳しいからな。」

「マジですか？」

「当たり前だ。どうせお前も分かっていたのだ。」

「まあ……。」

「なら、まずは腕立て、腹筋、背筋を2500だ。」

「……桁おかしくないか？しかもまずははってなんだよ。」

「それが終われば、神機を使っての訓練や反射神経を鍛えるから、覚悟しておけ。」

「仕事は……。」

「さつきも言つただろう。それに、私達を守るんだろう？…なら、これくらいこなして見せろ。」

初めの方はツバキさんこしては珍しく一矢を以てしながり言つていたが、最後の方は真剣になつていた。

「わかりましたよ。」

待つて言つたし、こんな事で弱音を吐くわけにはいかないよな。

「ハアハア、もうヤバい……。」

転生する時少し体力落ちるし、最近はほとんど鍛えてなかつたからな……。他にも2500なんて連續でやつてない、つてのもあるんだううけどな。

「よし、次に行くぞ。」

「少し休憩を。」

「駄目だ、お前は一人で近距離、遠距離とこなす事が出来る新型の神機使いに選ばれたんだ。新型は戦闘中に神機の変形を行いながら戦う。だが、この支部には新型がない。そのため、神機を使いこなすためには自らでなんとかしなければならない。」

「まあ、新型は今ほとんどないし、旧型とは戦い方も違いますね。」

「

実際、新型がいればチームの状況に合わせる事も出来るし、一人で戦う時も旧型よりは戦いやすいな。

「さうに、剣、銃、装甲、それぞれ三種類で計九種類の兵装を扱うため、他の神機使いより新型の神機使いにかかる負担は大きい。

そのため、お前は他の神機使いより覚える事やしなければならない事が山ほどあるんだ。」

「確かにせっかくの新型なのに、いつまでも戦場に出ないんじゃ意味ないですしね。」

それについてまでも戦場に出ないなんて、俺は嫌だしな。

「分かってるだろうが、この極東支部の連中は、新型神機使いを見たことがない……。その分お前にかかる期待も大きくなるはずだ。」

「わかつてます。俺が努力をして他の人の負担が軽くなるなら、俺に負担がかかるのはいいし、覚悟もしてますよ。」

「貴、アラガミに襲われた時に覚悟はしたしな。それに他の世界でも似たような事はあったからな。」

「なら、早速続きをするぞ。まずは、近距離攻撃、兵装の切り替え、遠距離攻撃だ。」

「了解。」

さてと、ひとつと訓練を終わらして、神機を使いこなせるようになりますか。

「今日はここまでだ。明日からは、実戦も入るから覚悟しておけよ。

」

「……」解……。」

「はあ……。今日はもう休め。本来なら一週間ほどに分けるのを一
日でやつたのだからな。」

「はあ！？何でそんな事を……。」

「お前が思つたよりもついてきたからな。ついやりすぎてしまつた。

」

「……。」

鬼……。この時から鬼教官だつたんだな……。訓練だつてのに、普通に神機使つて撃つってきたからな！おかしいだろ！人間相手に神機使つか！？

反射神経鍛えるとか一歩間違つたら死んでたぞ！？

「ああ、明日はリングウと共にミッションに行つてもいいからな。」

「わかりました……。じゃあ上がりますね……。」

「ああ、やうだ。今まで見てきた神機使いの中では、この動きをしていたぞ。」

「ありがとうございます。」

「ツバキさんが着めるのって珍しけな……。」

てか、入隊してすぐに実戦つてどうなんだろうな。やっぱり新型つて事もあって、早めに実戦に出したいんだろうな。

他にもツバキさんが一日で特訓終わらしたってのもあるんだり、つかどな。

「あれ？ 蒼影、疲れてるみたいだね。」

「蒼影どうかしたの？」

「ツツカにサクヤさん……。訓練が……。」

「ツバキさんの訓練ね。でも、一週間くらいでやる感じじゃなかったの？」

「多分だけど、一田田はそんなにやらないんじゃなかつた。他のツドイーターもやうだよね、サクヤさん。」

「やうよ、そんなに疲れるとは思わないけど。」

あ、やっぱり他はもつと楽なんだ。

「ツバキさんが一日でやらせたんだよ。明日から実戦だつて。」

「そいえば、蒼影は昔からツバキさんに気に入られてたからね。」

「大変だつたんだね。あ、訓練終わつたんなら、何か神機であつた？」

「特にはなかつたよ。実際に使つてなにかあつたら、リッカに言つよ。」

「うん、神機なら私に任せとよ。」

「蒼影、今日はまつ休んだり？」

「やつするよ。じゃあ、また。リッカ、サクヤさん。」

とつとと部屋に戻つて寝て体を休ませるか。明日からは実戦だし、疲れで動けなかつたらシャレにならないしな。

「見ない顔だな、ジーナ知つてるか？」

「知らないわ。」

「確か今日から配属になつた新型ではないか？」

あれは……ジーナとタツミ、ブレンダンか？

「今日から配属になりました波柳 蒼影です。」

「あなたが、今日配属された新型だつたのね。」

「なるほどな！俺は大森 タツミだ。まあ、最初のうちは無理せずに仲間を頼つていいからな！」

「俺はブレンダンだ。ブレンダン・バー・デル。よろしく。」

「ジーナ・ディキンソンよ。お互い頑張りましょう～。」

「この三人つてこの時期からいたのか？正直いついたとか原作にないからな……。」

「よろしくお願いします。」

「ああ、別に敬語なんて使わなくていいぞ。」

「わかった。」

「蒼影はいつから任務に出るんだ？」

「どうなんだらう？明日は実戦だけ、訓練なんだよな……。でも一応任務つて事になるのか？」

「一応実戦は明日からじい。」

「明日からか。大丈夫か？」

「はい、覚悟はしますから。」

「なら、俺から言つ事はない。なにがあつたらいつでも力になる。」

ではな。」

ブレンダンはさう言つて去つてこつた。やつぱりブレンダンつて冷
静だよな。

「待てよ、ブレンダンー、またな、蒼影ー。」

タツミもかよ。てか三人共任務から帰つてきたばかりだつたのか？

「まったく男どもは……。蒼影だつたわよね、帰るといふを止めて
悪かつたわ。」

「いえ、これからよろしくお願ひします、ジーナさん。」

「私も敬語はいらないわ。」

「わかつた。じゃあ、もし一緒に出る事があつたらよろしく。」

「ええ、よろしくね。」

ジーナと会話を交わして戻る。やつと休めるな。

なあ。

「なんだ？」

どうしたら、面白くなるかな？

「知るか！」

いやさ、D・C・？もだけど、お気に入り百が限界だと思つんだよ
な。後、感想。

「いや、才能じゃないか？」

だよなあ。まあ、趣味だし別にいいけど、やつぱりいろいろ感想欲
しかつたり、せつかくならいろいろな人に読んで欲しいよな。

「まあ、わからぬもないけどさ。」

まあ、いいや。今は見てくれてる人の為、自分の為に頑張るか。

「そうじる。」

じゃ、次回も読んでください。

「オペレーターとしての初実戦

「ん……、朝か？」

時間は……、まだ大丈夫だな。まあ、目が覚めたしエントランスに行くか。

「……なんか人少ないな。」

朝だからか？いや、朝だからってこんなに少ない筈ないよな。

「蒼影じゃない。」こんな朝早くからどうしたの？

エントランスに着くと、オペレーターの仕事をしているサクヤさんをみつけた。やっぱりオペレーターって忙しいのか？

「目が覚めたから、誰かいないかと思つてきたんだよ。一人でいても暇なだけだしな。」

「そう、私でよかつたら相手になるわよ。今は人も少ないから。」

「サンキュー。」

あ、といえばこの世界でも時計作つてるし、サクヤさんに渡しこうかな？一応金属は前の世界でかなり買い溜めしてたから、この世界でも作れたんだよな。一応は原作キャラ+予備をいくつか作つてる。

「ねえ、蒼影。今日リンクドウと行くのよね？」

「そうだけど？」

「昨日リンクドウには言つたの？」

「いや、面倒だし。あ、そうだ。これサクヤさんに。」

「これ……時計？でも、どうして。」

「趣味かな。前から考えてて、仲良い人には渡すつもりだったんだよ。ちなみに男女でデザインは違うから。後、裏に名前彫ってるから。」

「ありがとう、でもよく素材入ったわね。」

「まあね。」

「大事に使うわね。」

サクヤさんの笑顔が綺麗だ。やっぱり好きな人からのプレゼントは嬉しい物なのかな？

ん？気付いてるのかって？

当たり前だろ。二つの世界を生きて複数の人から好意を持たれてたし、付き合つた後とかは嫌われたくなかったし、人の気持ちは大分分かるようになるしな。

ちなみに、この世界は一夫多妻はアリらしい。といつても、許可されるのは養えるだけの力がある人だけだが。

だから、ゴッディーターやフェンリルで働いてる人間くらいしかないんだけど。ゴッディーターで複数の人と付き合った人は少ない。理由はいつ死ぬかも分からぬから、悲しませないためってのが多いみたいだな。

まったく無い訳ではないらしいけど。今でも他の支部に属るっての聞いた事がある。

「おはよう、サクヤさん、蒼影。」

「あ、ジーナ。今日はどうしたの？」

「リンドウさんには渡されて新型のミッションにつけ行く事になつたわ。」

ジーナか……、流石にまだ渡せないな。昨日知り合つたのに渡したらおかしいからな。今渡せるのは、リンドウ、サクヤさん、ツバキさんくらいか。

「なんかスマン。」

「肝心のリンドウはまだ来てないのね。」

「わざわざ来つたからもうすぐ来ると想つわ。」

相変わらずだな、リンドウは。てか、いつからなんだ？

「なあ、ジーナ。俺つてこいつミッションに行くんだ？」

「リンゴウさんが来たら、すぐに行くわ。」

「うーす、待たせたな。んで、新型は……、あ？ 蒼影じゃねえか。何でこんな所にいんだよ。」

「ふふっ、リンゴウの言ひ新型が蒼影よ。」

「は？ マジで蒼影が？」

驚いてるな。サクヤさんやジーナなんか少し笑ってるよ。

やつぱり内緒にしてよかつたな。リンゴウのこんな表情を見るとは思わなかつたよ。

「まさか、蒼影がねえ……。まあ、いいか。なら、早速行くぞ。サクヤ、ミッション頼むな。」

「分かつてゐるわ。頑張つてね、蒼影、ジーナ。」

神機保管庫エリアに移動し、俺の神機が納められたケースを持って、ヘリに飛び乗る。俺は一応新人だし、オウガテイルが相手だろうな。

さほど時間はかからず、俺達の乗ったヘリは任務の場所である「贖罪の街」へと到着した。

昔は人が生活していた大都市だつたんだらうけど、アラガミの出現直後に崩壊し、無惨に食い破られたビル群が今も残つてゐる。

「……も隨分荒れちまつたな……。んじや、蒼影。実施演習を始めゐる。……命令は三つ。」

命令という単語を聞いて、小さい時から一緒に過ごしていたからなんか笑えるな。

「死ぬな。死にそうになつたら逃げる。そんで隠れる。運が良ければ不意をついてぶつ殺せ。……あ、これじゃ四つか……。」

「……、いやわざとかな?まあ、思わず吹き出してしまつた。」ひらを見てリングウは微笑む。

「そりそり、肩の力を抜いてな。とにかく生き延びることだけを考えろ。生きてさえいりや、あとは万事どうでもなる」

「分かつてゐる。一応言つておくけど、リングウも必ず生き残れよ。後、何かあつても一人で残つて困とかなるなよ。」

原作のセリフだし好きだけど、なんか悔しかつたし少し空氣を壊してやつた。

「はは、分かつてゐる。」

「んじや、じうある?俺が出て危なくなつたらフォローつか?」

「私はそれでいいわ。」

「なら、それで行くぞ。蒼影頑張れ。」

いたな……。今回の討伐対象のアラガミ、オウガテイルが一體目の前の広場を歩いている。いきなり一體かよ……。

オウガテイルからは建物の影になつていて、こつちには気付いてないみたいだな。

「ならつー。」

物影から飛び出し、手前にいるオウガテイルを数回斬りつける。怯み倒れたオウガテイルを無視し、もう一體を斬りつける。

そして、一度離れ銃に切り替え神属性の弾丸を撃ち込む。OPが無くなると、再び近づき斬り込む。そして一體倒し、一體目を倒そうとする。

つ！？

後ろから放たれたレーザーを横に転がり避ける。

「つたく、何だよ！？」

レーザーが撃たれた場所を見ると、小型のアラガミ、ザイゴートがいた。

おいおい、オウガテイルだけじゃないわけ？いきなりイレギュラー

かよな。まあ、いい。とつとと倒すか！

まずはザイゴートに向かつて走り、毒ガスやタックルをされる前に空中で斬りつけ、ザイゴートを地面に落とす。

そして、神機に集中すると、神機から黒い口のような物が出てくる。神機の補喰形態『プレデターフォーム』だ。そして落ちたザイゴートを補喰し、バースト状態になる。

補喰で手に入れたアラガミバレットを使い、オウガテイルを倒す。そして、再び浮かび上がろうとしたザイゴートを斬りつけ倒す。

「ふう……。」

「凄いわね、新人と思えないわ。」

「ありがと、ジーナ。俺は役に立ちそつか？」

「ええ。」

「俺達の出番は無かつたみたいだな。ザイゴートが来た時は心配したが、無用だつたみたいだな。」

「まあ、ツバキさんの訓練が厳しかつたから。」

「姉上か……。災難だつたな。まあ、次から一人でも大丈夫なんじやないか？」

「俺がわかるかよ。」

「んじゃ、帰つて報告するか。」

「了解。報告は任せたリングドウ。」

「何でだよ。まあ、イレギュラーにもそれなりと対応したし、これくらいはいいか。」

「サンキュー。ジーナも行こうぜ。」

「ええ。」

帰りのヘリに乗り込み、アナグラへと戻る。まだ三日も経っていないにかなり疲れたな。

「疲れた……。」

「初めての実戦はどうだった?」

「いきなりイレギュラーがあつて疲れたよ。」

「何があったの?」

「蒼影が戦つてゐる時に、ザイゴートが来たんだよ。」

「そりなの、大丈夫だったのよね？」

「ああ。俺達が何かをする前に一人で片付けてたしな。」

「流石、蒼影ね。新人はオウガテイルにも苦戦する事があるのに。」

「やつぱり新人はオウガテイルにも苦戦するんだな。まあ、初めての実戦で訓練と同じように行動出来る訳ないか。」

「期待の新人だな。これから頼むぞ、蒼影。」

「分かつてゐよ。」

「蒼影、今日は特にする事無いはずだから、休んでたら? 多分明日からは、普通にミッションに行くと思つわよ。今日の事で、実力は問題ないと見なされると思つわ。」

「なら、休むとするよ。」

「あー、リッカの所に行つて神機の調整してもらわないとな。……
明日でいいか。」

「アシストマーク」の初実戦（後書き）

「 なあ。 」

「ん? どうした? 」

「 戰い短くないか? 」

まあ、戦闘描画芦田だしお。少しずつ戦へましたこと思ひ立たせや。

「 上手くなるのか? 」

知らね。まあ、なんとかなるや。

「 まあ、頑張れ。 」

ああ。んじや、今回せひの邊で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174z/>

転生して異世界廻り～GOD EATER 編～

2011年12月16日17時48分発行